



当美術館では、高知出身や高知にゆかりのある作家の作品を、前期・後期に分けて紹介していきますが、11月7日からは後期がスタートします。

後期に紹介する作家は、明治37年高知市生まれの中村博、明治45年中土佐町生まれの福富栄、大正5年田野町生まれの山本茂一郎、同じく大正5年中村市生まれの木村林吉、池川町生まれの書家・福原云外、大正12年春野町生まれの小松明、昭和3年土佐清水市生まれの黒原和男、昭和9年宿毛市生まれの奥谷博など、一度は耳にしたことのある作家ではないでしょうか。

「土佐の熱き芸術家たち」

後期：昭和から平成へ
11月7日(土)～12月20日(日)



▲門田光秋作 ふるさとの川

年土佐山田町生まれの画家、門田光秋をご存知の方は多いと思います。写真の作品は門田光秋が昭和60年、63年に制作し、その後、平成7年に手直しして完成した油彩画『ふるさとの川(神母ノ木)』です。この絵には、長くふるさとを離れ、東京に住んでいるからこそ、ふるさとの山や川に寄せる強い思いがにじみ出ているような気がします。その思いは、単に『風景』というのではない『ふるさ

との川』という題名にも表わされています。絵の前に立つと、まるで自分がこの風景の中に包み込まれるような、やすらかな気持ちになります。それは、絵の中に描き込まれたふるさとの澄みきった空気や川のせせらぎ、光り輝く木々の葉が、心にやすらぎを与えてくれるからだだと思います。今回も、前期同様、四国銀行や個人の方々の所蔵品を多数お借りしており、初公開の作品もご鑑賞いただけます。

また、期間中ロビーでは『若き芸術家たちの今』と題して、一週間ごとのレレ展を開催します。今を生きる若手作家の力作をお楽しみ下さい。ロビー展は観覧無料となっておりますので、各週ごと、お気軽にお越しただいただければと思います。

皆さまのご来館を心よりお待ちしております。
(館長・北 泰子)

図書館だより

市立図書館



第63回読書週間

【期間】 10月27日(火)～11月9日(月)

【標語】 思わず夢中になりました

市立図書館では、読書週間にあわせて「おはなし会」を計画しました。たくさんの方の参加をお待ちしています。

☆秋のおはなし会(本館)

【日時】 11月14日(土) 10時～

【場所】 図書館本館
【内容】 読み聞かせ、手遊び、オリジナルミニカメラを作ろうなど

【対象】

幼児・小学2年生まで
【問い合わせ先】
本館 ☎53-0301



おすすめの1冊

「命あるかぎり 松本サリン事件を超えて」 (作:河野 義行)



どんな人にも死が訪れる—それは頭で分かっている、いざ家族の死に直面すれば納得できない思いを抱え込む。そんな時、河野さんの『人はみんな幸せになるために生まれてきたのだ』の一文がじわっと心にしみた。たとえ不幸に見舞われても人を恨まず憎まず、今ここに幸せを見つけて楽しむ。それが彼の生き方である。淡々とした語りによりユーモアを混ぜ、その一字一句に勇気づけられる。

50代女性 (土佐山田町)

第3回香美地区短詩型文学振興大会

(9月26日・香南市 のいちふれあいセンター)
※ご紹介している受賞作品は市内の方の作品のみです。

【短歌の部】(選者 楠瀬兵五郎氏)

特選 くり返し詠はむことの二つ有り

四季なき国の嫁と孫らを 小野川恵仁

優秀 別れきてつゆの風さへ和まじき

ひとつ安心得たる思ひに 佐竹 玲子

佳作 宵祭りアイスクリームを買ひくるる

夫と指ふれほのぼのとせり 大石紗智子

佳作 つゆの草刈り終えてキュウリ我が食めば

霧はたなびく窪みに沿いて 宮地 亀好

【俳句の部】(選者 前田欣一氏)

特選 向日葵の万の喝采日蝕に

黒岩千英子

優秀 捨て畑へ草刈りに行く帰郷かな

吉田 芳

佳作 蝉しぐれ血が体内を一巡す

榎谷 雅道

佳作 蓮咲いて大きな風の吹き渡る

西川 常夫

佳作 のうぜんを零し鍛冶屋に火の気なく

前田美智子

佳作 終戦忌異国の野辺の父想ふ

黒岩 幸

【川柳の部】(選者 常石麗子氏)

優秀 悴せは昨日と同じ今日がある

森本 幸美

第4回香美市芸術祭短歌会・俳句会

(10月4日・プラザ八王子)

【短歌会】(選者 楠瀬兵五郎氏)

特選 足元を夜風ひんやり過ぎ行けり

夫留守の夜の電話の長く 都築 初代

特選 百歳も生きたくない友に言い

今日も見ているテレビの「百歳」 吉本 悦子

褒状 残る眼になほ生き続がむ日に三度さす

眼薬も言はるるままに 小松もとみ

褒状 培はず余生たのしめ遺言(ぬ)ごんせし

夫よ子の作(さく)を傍観もならず 大岸由起子

褒状 顔浸(つ)けのできざりし友の成功を

晴れやかに告げくる孫に正さる 古川 安子

褒状 シャンデリヤ三十五年で取り替へ

塵も光るか此の明るさは 法光院俊子

褒状 伸びに伸び底に届き実をつけぬ

残暑の西日さえぎるゴーヤ 竹村 稔美

褒状 果ててゆく庭の総てを申ふや

刈り残されし萩の一群(ひとむら) 長谷 千鶴

【俳句会】(選者 前田欣一氏)

特選 ゆつくりと二百十日の猫が行く

類張つて父が飯喰う秋の暮 乾 真紀子

褒状 捨て鐘のひとは夜へ花茗荷

安丸 榎子

褒状 過疎の火を絶やさずと燃ゆ曼珠沙華

西川 常夫

褒状 釣人のひとりひとりの秋の川

車力の輪壁に立てかけ紅葉茶屋 明石 亜生

褒状 虫取りの空傾けて大榎(えのき)

空つぼの虫籠下げて一両車 前田美智子